



日蓮大聖人御真筆写

# 光久御住職御書講義

## 立正安国論

発行所

日蓮正宗法華講妙縁寺支部  
〒130-0001  
東京都墨田区吾妻橋 2-2-10  
TEL 03(3622)5086  
FAX 03(3829)2766

### 第375号

情(つらつら) 微管(びかん) を傾け聊(いささか) 經文を披(ひら) たるに、世皆(みな) 正に背き人惡(ことごと) く惡に帰す。故に善神 國を捨て、相(あい) 去り、聖人所を辞して還らず。是(ここ) を以て 魔来たり鬼(き) 来たり、災(さい) 起り難(なん) 起る。言はず んばあるべからず。恐れずんばあるべからず。(御書 二三四頁)

### 〈通釈〉

よくよく私の僅かばかりの非常に小さな見解であります。ほんの少し經文を開いてみるに、世の民衆は皆正しい仏法に背き、悉く間違つた教えに帰依している。それによつて善神は國を捨て去り、聖人は所を辞して帰つてこない。善神・聖人にかわつて、魔神や鬼神が跳梁跋扈(ちやうりやうばつこ) し、その結果として災いが起り、難が起るのである。この事は声を大にして言わなければならない事であり、かつ恐れなくてはならない事である。

### 解説

『立正安国論』は文応元(一二二六〇)

年七月十六日、大聖人様が三十九歳の御時、宿谷入道を通して鎌倉幕府

の最高権力者であつた五代執権の北条時頼(最明寺入道) に対して上

呈された国主諫曉の書であります。

『種々御振舞御書』では「此の書は白樂天が樂府(『新樂府』。腐敗した社

会を批判し、人民の窮乏を訴えた諷諭詩)にも越へ、仏の未来記にもとらず、末代の不思議な事にこれにすぎん」(御書一〇五五頁)と御教示され、末法万年にわたる一切の民衆、一國ないし全世界への折伏諫曉の書であると拝されます。

昨今の日本ならびに世界の情勢を見るに、欧州債務危機や中近東の緊迫した情勢、中国の海洋戦略による周辺国のトラブル、東日本大震災で改めて露呈した原発の脆弱さと進まない復興などの先行きの見えない不安と危急。まさに『立正安国論』冒頭の「之(これ)を悲しまざるの族(やから)敢(あ)へて一人(いちにん)も無し」(御書二三四頁)の通りの世情ではないでしょうか。

本文はその第一段の、客人の災害や苦難の根源を乞うた主人の答えであり、『立正安国論』全体に一貫する要旨であります。不幸の根源である

も肝要なことは、この信心のすばらしさ、そして喜びを己れだけのものとせず、一人でも多くの人々に伝え、下種し、折伏を行じていくこと」(大日蓮第七九三号一八頁)と御指南あそばされています。末法今日の下種は聞法下種であり、いまだ仏種を植えざる衆生に大聖人様の仏法を説き聞かせて、衆生の心田に仏種を植えていく事こそが時に適つた慈悲行なのです。

されば『法華初心成仏抄』の「仏になる法華経を耳にふれぬれば、是を種として必ず仏になるなり。(中略)とてもかくても法華経を強ひて説き聞かすべし。信ぜん人は仏になるべし、謗ぜん者は毒鼓(どつく)の縁となつて仏になるべきなり。何(いか)にとしても仏の種は法華経より外になきなり」(御書一三二六頁)との御金言を肝に銘じる事が大事であります。そして声を大にして謗法を責め、一人でも多くの方々を菩提寺にお連れして無明を照らし、今年の誓願目標一二〇名達成を実行し更に平成二十七年の御命題に向けて前進していきましよう! (文責・編集部)

たちの使命です。そのためには、御本尊様に真剣に唱題をあげて勇氣をいただき、歡喜の心で下種・折伏していく事が重要であります。

御法主日如上人猥下様は「今、最

